

# フ ラ イ エ ・ リ ュ ト メ ン の 計 測

大 和 啓 祐

(文理学部独文研究室)

## Zur Messung der Freien Rhythmen

Keisuke YAMATO

*Seminar für deutsche Philologie der philosophisch-naturwissenschaftlichen Fakultät*

**Zusammenfassung:** Man stößt manchmal auf die schwer zu überwindenden Schwierigkeiten, wenn man Freie Rhythmen zu skandieren braucht, weil sie keine metrischen Vorschriften haben, mit anderen Worten, hebungs- und senkungsfreie Verse sind. Nach KLOPSTOCK kann der Leser nicht wissen, wie der Dichter ausgesprochen haben will. Wenn es so ist, besteht die erste Aufgabe des Lesers darin, daß er mehrere Möglichkeiten der Messung herausbringt und dann eine darunter als die angemessenste wählt. Um diesen Verfahren bewußterweise nachzufolgen und konsequent zu ergründen, wäre es fruchtbarer, den Betrachtungskreis auf die Gedichte eines bestimmten Dichters zu beschränken und sie eingehend zu besprechen, als sich in die Wirrnis der Formen zu verlieren, die seit 1758 die meisten deutschen Dichter gestaltet haben, denn der Begriff der Freien Rhythmen faßt viele Erscheinungen zusammen, die historisch und morphologisch sehr verschiedenartig sind.

HEUSLER beschreibt die Freien Rhythmen von Goethe recht ausführlich und stellt dabei 3 Typen auf. Es wäre ungemein aufschlußreich, daß man mit Hilfe von den quantitativ konkreten Hinweisen und den vortrefflichen Auslegungen, die HEUSLER in „Deutscher Versgeschichte“ gibt, reiche rhythmische Linie der Verse GOETHE nachspürt, auch wenn die Frage noch immer unentschieden bliebe, ob man in Hinsicht auf die Messungsmethode der Freien Rhythmen etwas Allgemeingültiges auffindig machen könne.

Fr. Rhythmen はドイツ詩史の中で、その成立に関して特異な位置を占める。ほとんどすべてのドイツ語の詩行・詩節・詩型は、古典語と伊語・西語・英語・仏語等近代語のそれらの移入に始まったのに対し、PINDAR, OSSIAN, LUTHER 訳旧約聖書の詩篇・雅歌等から少なからぬ刺戟と影響を受けたことが指摘され得るとはいえ、Fr. Rhythmen の創始者 KLOPSTOCK がそのまゝ模倣することの出来た何等かの *Versmaß* は存在しない。古代にも外国にも規範を仰ぐことなしに KLOPSTOCK, HERDER, GOETHE らの形式感覚に支られて新たに形成された Fr. Rhy. はドイツ文学史にとって極めて重要な形式となった。その後 SCHUBART, HÖLDERLIN, NOVALIS, TIECK, HEINE, MÖRIKE, NIETZSCHE, LILIENCRON, A. HOLZ, STADLER, MORGENSTERN, CAROSSA, TRAKL, WEINHEBER, LOERKE, BENN... は Fr. Rhy. を用いて詩作した詩人たちの一部にすぎない。またドイツ語からの形式に関する数少ない寄与のひとつとして近代欧米文学の共有財産ともなった (W. WHITMAN, P. CLAUDEL, T. S. ELLOT, D. THOMAS)。

一方 *Metrik* 及至 *Rhythmus* について考察しようとする場合、我々は Fr. Rhy. に於て甚だ厄介な問題にかゝるのである。ごく僅かの例外を除いて、ほとんどの種類の詩行には予め提示された図式 *Schema* があって、揚音 *Hebung* の所在を、従って小節 *Takt* の種類と配置をとらえるのに、さほどの困難はない。

*itzo stand auf einmal bei des allerheiligsten eingang* (KLOPSTOCK) が *Hexameter* であることが判れば、その *Skansion* は半ば終わったと考えてよい。しかるに HEUSLER は、*Hexameter* という尺度をもってしてもなお、理論的には次の5通りの計測の仕方 *Messung* が許容され、1) のみならず 2), 3) は詩人自身によって是認されたかも知れないとする。

- 1) *ítzo stánd auf éinmal bei dés allerhéiligsten éingang*
- 2) *ítzo stánd auf einmál bei dés allerhéiligsten éingang*
- 3) *ítzo stánd auf einmál bei des állerhéiligsten éingang*
- 4) *ítzo stand áuf einmál bei dés allerhéiligsten éingang*
- 5) *ítzo stand áuf einmál bei des állerhéiligsten éingang*

行のおわり5音節の帰属する2つの小節が固定的で、これ以外に2音節または3音節から成る4小節がどのように並んでいるかを解決すればよい。Hexameterの場合ですら、これだけの可能性が想定出来るとすれば、すべての韻律上、律動上の規定から自由である Fr. Rhy. の計測には如何なる拠り所があり得るのか。

F. G. JÜNGER は「KLOPSTOCK 自身が既に述べていることだが、読者には、如何にして語り手及至詩人が不定の長さをもつ音節を発音したと主張するかを知ることは出来ない。このことばは正しいし同時にまた、発音を決定するのは読者に委ねられたまゝであることを意味する。従って、言わば詩法上のリズムについて、自ら共同の作業に参加するようとの要請が、読者に向ってなされているのである。」とし、G. v. WILPERT は Fr. Rhy. のもつ陶酔的性格が「固定的な揚音図式の欠除のため、かなり困難ではあるが、生き生きとした共感に充ち、輪郭を浮き彫りにする朗読によってのみ獲得される」と言い、GOETHE の Fr. Rhy. に関し W. MOHR は「語り手はテキストの作曲者になる」と述べる。

我々は Fr. Rhy. による作品について何かを論じはじめる前に詩行という音節系列に強弱少くとも2段階のアクセントを附して発音しなければならない。そして計測のいくつかの可能性の中から1つを選ぶ場合に、それにどの程度の妥当性があるかを確かめたいとも考えるであろう。一義的に「如何に読むべきか」を指示するものが何一つないとしても「如何に読むことが出来るか」について具体的、詳細な記述があるならば、それが、たとえひとつの作品についてであれ、Fr. Rhy. の計測の方法一般についても少なからぬ示唆を我々に与える筈である。

Fr. Rhy. の名称のもとに総括される広汎な作品群のリズムの形態が、それぞれの詩人によって、きわめて多様であるのは、その韻律上の特徴から容易に理解出来る所である。従って「如何に読むことが出来るか」の問題に関しては、ひとりの詩人の Fr. Rhy. による作品すべてについて観察するのが、迷路に陥ることを避け、より多くの成果を得る途であると考えられる。

「KLOPSTOCK のそれは生き残らなかつたのに GOETHE の Hymne がドイツ文学の中で最も愛好され普及したものに数えられる理由は、その内容と形式にある」という HEUSLER の発言の前半を、例えば1968年版 v. WIESE 編の ECHTMEYER : Dt. Gedichte によって確認することは出来ないであろうか。KLOPSTOCK からは Die Frühlingsfeier 1篇だけが、恐らくは Werther とは無関係ではなく採られているのに対し、GOETHE の Fr. Rhy. からは9つの作品が収録されている。Fr. Rhy. の歴史は GOETHE なしに現代までの展開を見ることがなかつたであろうし、GOETHE にとっても Fr. Rhy. は殊にその青年期に重要な意味をもつ形式であった。

幸い HEUSLER : Dt. Versgeschichte は 51. Abschnitt. Die Freien Rhythmen に於て GOETHE の作品個々のリズムについて相当詳細な記述を試みている。これによって、Fr. Rhy. の計測の方法を、更には、Fr. Rhy. 一般の形態的考察を深めたい。GOETHE の Fr. Rhy. として HEUSLER は次のものを挙げている。便宜上通し番号を附し、Weimarer Ausgabe と Hamburger Ausgabe の巻数・頁数を併記する。

1. Behrisch-Oden W4, 182 H1, 21
2. Pindars 5. Olympische Ode W4, 315
3. Wandrers Sturmlied W2, 67 H1, 33
4. Der Wanderer W2, 170 H1, 36
5. Felsweihe-Gesang W4, 187
6. Elysium W4, 189 H1, 86
7. Pilgers Morgenlied W4, 192 H1, 86
8. (Mahomets

Gesang] W2, 53 H1, 42 9. [Ganymed] W2, 79 H1, 46 10. Adler und Taube W2, 74 H1, 57 11. [An Schwager Kronos] W2, 65 H1, 47 12. Prometheus W2, 76 H1, 44 13. Herbstgefühl W1, 83 H1, 103 (Im Herbst) 14. Urfaust 1124~50 W39, 291 H3, 406 15. Urfaust 1311~71 (Domszene) W39, 302 H3, 412 16. Proserpina W17, 40 17. Harzreise im Winter W2, 61 H1, 50 18. Gesang der Geister über dem Wasser W2, 56 H1, 143 19. [Meine Göttin] W2, 58 H1, 144 20. [Grenzen der Menschheit] W2, 81 H1, 146 21. Das Göttliche W2, 83 H1, 147 22. Nereidenchor W11, 333 23. Schlechter Trost<Divan W6, 57 H2, 30 24. Gruß<Divan W6, 57 H2, 31 25. Die schön geschriebenen<Divan W6, 159 H2, 70 26. Du kleiner Schelm du!<Divan W6, 211 H2, 93 27. Jene garstige Vettel<Divan W6, 214 H2, 94 28. Laß mich weinen!<Divan W6, 290 H2, 124 29. Nicht mehr auf Seidenblatt<Divan W6, 293 H2, 125 30. Faust II 9110~21 W15, 204 H3, 275 31. Faust II 9970~80 W15, 240 H3, 301 32. Faust II 9985~91 W15, 241 H3, 301 33. Lilis Park W2, 87 H1, 98 34. Monolog des Askalaphus W13, 35 35. Concerto dramatico W38, 4 36. Daß Suleika von Jussuph entzückt war<Divan W6, 144 H2, 62 37. Anklang<Divan W6, 255 H2, 111 38. Jahrmärktfest zu Plundersweilern の1部。 33. 以下は gereimt であり〔 〕は HEUSLER によって Fr. Rhy. の名称を拒否されたものである。

これに対して SCHLAWE が Cincinnati 大学の電算機によって詩節形式を分類した際に GOETHE の Fr. Rhy. として挙げたものは次の通りである。年代は作品の成立、V. とある場合のみ公刊を意味する。

<は冒頭詩行 \*は HEUSLER に言及されていないもの。

1767 Drei Oden an Behrlich, Der Wanderer, Elysium, Felsweihe-Gesang, Mahomets Gesang, Pilgers Morgenlied/1773 Adler und Taube, An Schwager Kronos, Ganymed, Kenner und Künstler\* H1, 61, Prometheus/V.1775 Bleibe, bleibe bei mir<\* W4, 96H1, 97/1776 Mut\* W1, 67 H1, 131 (Eis-Leben-Lied), Wandrers Sturmlied, Harzreise im Winter/1779 Gesang der Geister/1780 Meine Göttin/1781 An Lida\* W2, 109H1, 127, Grenzen der Menschheit/1783 Das Göttliche/1314 Laß mich weinen<, Die schön geschriebenen<, Gruß, Jene garstige Vettel<, Schlechter Trost/1819 Nicht mehr auf Seidenblatt/1827 Du kleiner Schelm<

双方の表が必しも重ならないのは、主として、HEUSLER が gereimt の作品を採ったのに SCHLAWE がこれを Madrigalvers の項目に収めたこと、HEUSLER には劇詩・敘事詩が含まれているが、SCHLAWE は抒情詩 (Zürich, Artemis 版 Gedenkausgabe Bd. 1.~3.) だけに限定したことによる。ジャンルの問題を離れても両者には既に分類上の原理の相違が見られる。

概念規定の仕方に戻って見ると、HEUSLER は KLOPSTOCK のそれについてではあるが、Fr. Rhy. の特徴として次の5点を挙げている。即ち 1. freie Taktzahl 2. freie Füllung 3. Reimlosigkeit 4. Strophenlosigkeit 5. Vielgestaltigkeit である。これらが様々の度合で混り合うという。それでは Madrigalvers や Rezitativvers によって代表される Freie Verse と Fr. Rhy. の相違について HEUSLER はどのような目安を立てたかを見易い表にすると

	a) gereimt	b) alternierend	c) $\frac{1}{4}$ 音節のTakt	d)多義性	e)軽いTonbeugung
Fr. Rhy.	×	×	○ ×	○ ×	×
Fr. Vers.	○ ×	○ ×	×	×	○

すべての場合を考慮に入れると、ある詩行がいずれに分類されるべきかを決定するのは e) 項だけであることが判る。しかし軽い *Tonbeugung* があるかどうかの印象は、かなり曖昧な指標たらざるを得ない。SCHLAWE による諸概念の規定は *Vers irréguliers* を加えることによって、より整理されたものとなっている。

	Hebung 変る	Senkung 変る	Hebung Senkung } 変る
gereimt	Madrigalvers Vers libres Faustvers	Knittelvers (4hebig)	Vers irréguliers (=gereimte Fr. Rhy.)
reimlos	Freie Verse		Fr. Rhythmen

HEUSLER による第5の特徴 *Vielgestaltigkeit* は、前に引用した *Hexameter* の例の様に詩行の種類が定まっていますが *Hebung* の数が固定していても、幾通りかの計測が可能な場合に現われるが、一層顕著な例として SCHILLER : *Wallensteins Lager* の次の1行の *Knittelvers* が挙げられる。最初の音節に *Betonung* が置かれる場合を除いても次の8通りの計測が考えられ得る。

	da-	für	sind	wir	des	Fried-	länders	re-	gi-	ment
1)	◡	◡	◡	◡	◡	◡	◡	◡	◡	◡
2)	◡	◡	◡	◡	◡	◡	◡	◡	◡	◡
3)	◡	◡	◡	◡	◡	◡	◡	◡	◡	◡
4)	◡	◡	◡	◡	◡	◡	◡	◡	◡	◡
5)	◡	◡	◡	◡	◡	◡	◡	◡	◡	◡
6)	◡	◡	◡	◡	◡	◡	◡	◡	◡	◡
7)	◡	◡	◡	◡	◡	◡	◡	◡	◡	◡
8)	◡	◡	◡	◡	◡	◡	◡	◡	◡	◡

*Knittelvers* に於ては *Hebung* の数が4ときまっているだけで各行の小節内容が自由に变化するのは勿論であるが、上例のように1つの行が多様な区切り方を許容することもあり得る。この場合は少なくとも8種の *Gestalt* をもつと言い換えることが出来る。即ち *vielgestaltig* なのである。作者自身が1つだけの計測を決断していたか、それとも複数の可能性を妥当としたかは解決の容易でない問題である。

例にとつた *Hexameter* も *Knittelvers* も、ともに固定的 *Hebung* 数をもつものに対して *Fr. Rhy.* の場合は、それすら自由である。詩人が客観的な *Vielgestaltigkeit* を意図したか否かを確定することは容易でないとして、少なくとも我々の前に提示された詩行は、屢々一義性 *Eindeutigkeit* をもたない。即ち読者の側からは *mehrdeutig* なものである。

KLOPSTOCK: *Die Frühlingsfeier* の1行 *Und nun schweigen sie ! Langsam wandelt* の前半5音節は

◡	×	◡	◡	◡
◡	×	◡	×	◡
×	◡	◡	◡	◡
×	◡	◡	×	◡
◡	◡	◡	◡	◡
◡	◡	◡	×	◡

の6つの可能性をもち、Hebung の数は1, 2, 3いずれとも定めることが許される。KAYSER は「実験的研究は、時間間隔には所謂最適値 Optimalwert があることをすら確認した。それはほぼ  $\frac{2}{3}$  秒附近にある。かくて我々は例えば Fr. Rhy. に於て、ゆっくり朗唱する際にはより多くの Akzent を用いるが、早目の朗読の場合はかなりの Akzent を抑える。かの適正值を得る為にはほかならない。」という。

差当っての課題を HEUSLER の計測の方法とその実際上の適用を追跡することに絞りたい。

彼は GOETHE の Fr. Rhy. を3つの類型に大別した。

- A. alternierend な Madrigalvers を出発点とするもの。
- B. Auf-Ab (Alternation) が劣勢で Daktylus-Anapäst の混合が印象を決定するもの。
- C. 特別な Lied 的形式

類型化の原理となっているのは反復される同一なるものが何であるかに注目することであると見てよい。即ちそれは A. に於ては |××| の小節、B. に於ては |×××| と |—×| の小節、C. に於ては各詩行に含まれる小節の種類と数である。そして A. B. に於ては、この反復を中断しようとする2音節または3音節の上拍 Auftakt と4音節の内拍 Innentakt と1音節の内拍(従って2以上の Hebung は衝突する)が、言うならば Fr. Rhy. としての純粋度を高める free な要素として働きかけると解釈するのである。「純粋な Fr. Rhy. を gebunden な形式から、更には alternierend で reimlos な詩行から分離しようとする HEUSLER の試みは、GOETHE の場合、可能でも有意義でもない；それら形式は相互に浸透し合っているのである」と MOHR は批判するのであるが、諸要素の融合の中から Hebung の適当な所在を見出さなければならない切実な必要に迫られる我々は HEUSLER という一枚の漏紙によって分析の1つの可能性を追求しようとするのである。各類型について2, 3の作品を選んで計測を試み、そこで検討を経た方法によって全ての詩を整序して置きたい。

### Typus A

Adler und Taube がこれに属し、Trochäus×1, 2音節上拍×2, 1音節内拍×4, 休止×1の所在が明らかにされ、残りの部分は Jambus×46 であることが示されているので次のように skandieren するほかはない。下線部分は HEUSLER 例示。

Ein Ädlerjüngling hob die Flügel/ Nach Raub aus;/ Ihn traf des Jägers Pfeil und schnitt/  
Der rechten Schwinge Sennkraft ab./ Er stürzt hinab in einen Myrthenhain, / 6 Fraß  
seinen Schmerz drei Tage lang, / Und zückt an Qual/ Drei lange, lange Nächte lang:/  
Zuletzt heilt ihn/ Allgegenwärt'ger Balsam/ 11 Allheilender Natur./ Er schleicht aus dem  
Gebüsch hervor/ Und reckt die Flügel —äch !/ Die Schwingkraft weggeschnitten —/ Hebt  
sich mühsam kaum/ Am Boden weg/ Unwürd'gem Raubbedürfnis nach, / Und ruht  
tiefträuernd/ 19 Auf dem niedern Fels am Bach; / Er blickt zur Eich' hinauf, / Hinauf △  
zum Himmel, / Und eine Träne füllt sein hohes Aug'.// Da kommt mutwillig durch die  
Myrtenäste/ Dahérgerauscht ein Taubenpaar, / 25 Läßt sich herab und wandelt nickend/  
26 Über goldnen Sand und Bach, / Und rückt einander an;/ Ihr rötlich Auge bühlt umher, /  
Erblickt den Innigtrauernden./ Der Täuber schwingt neugiergesellig sich/ Zum nahen  
Büsch und blickt/ Mit Selbstgefälligkeit ihn freundlich an./ Du träuerst, liebelt er, / Sei  
guten Mutes, Freund !/ 35 Hast du zur ruhigen Glückseligkeit/ Nicht alles hier ?/ Kannst  
du der Abendsonne Schein/ Auf weichem Moos am Bache nicht/ Die Brust entgegen  
heben?/ Du wandelst durch der Blumen frischen Tau, / 43 Pflückst aus dem Überfluß/



- Und meine Hütte, die du nicht gebaut, x x x x x x x x x x  
x x x x x x x x x x
- Und meinen Herd, x x x x  
x x x x
- Um dessen Glut 10
- Du mich beneidest. x x x x x  
x x x x x
- ◎ Ich kenne nichts Ärmeres  
/ Unter der Sonn', als euch, Götter!
- ◎ Ihr nähret kümmerlich  
○ Von Opfersteuern (Und Gebetshauch) 15  
/ Und Gebetshauch x x x x  
x x x x
- Eure Majestät, x x x x x  
x x x x x
- Und darbtet ^ ^, wären
- ◎ Nicht Kinder ^ und Bettler
- Hoffnungsvolle Tören. 20
- Da ich ein Kind war, x x x x x  
x x x x x
- ◎ Nicht wußte wo aus noch ein,  
◎ Kehrt' ich mein verirrtes Auge zur Sonne, x x x x x x ...  
x x x x x x ...
- (Zur Sonne,) / als wenn drüber war' ein Ohr x x x x x x x  
x x x x x x x
- (Ein Ohr,) / zu hören meine Klage ^, 25
- Ein Herz ^, wie mein's ^,
- Sich des Bedrängten zu erbarmen. x x x x x x x x  
x x x x x x x x
- Wer half mir  
/ Wider der Titanen Übermut?
- Wer rettete vom Tode mich, x x x x x x x x  
x x x x x x x x
- Von Sklaverei?  
○ Hast du nicht alles selbst vollendet, x x x x x x x x  
x x x x x x x x
- Heilig glühend Herz?
- Und glühtest jung und gut,
- Betrögen ^ ^, Rettungsdank 35
- Dem Schlafenden da droben? x x x x x x x

× × × × × × × ×

● Ich dich ehren ? Wofür ? × × × × × ×

× × × × × ×

● Hast du die Schmerzen gelindert × × × × × × × ×

× × × × × × × ×

● Jé des Beládenen ?

● Hast du die Tränen gestillet × × × × × × × ×

× × × × × × × ×

40

● Jé des Geángsteten ?

● Hat nicht mich zum Manne geschmiedet × × × × × × × ×

× × × × × × × ×

〰 | Die allmáchtige Zeit

Und das ewige Schicksal, × × × × × × × ×

× × × × × × × ×

〰 | Meine Herrn und deine ? × × × × × ×

× × × × × ×

45

● Wáhnstest du étwá,

◎ Ich sóllte das Lében hássen,

○ In Wústen fléhen,

〰 | Weil nicht álle Blúentráume réiften ? × × × × × × × ×● (Blúentráume réiften ?) × × × × × × × ×

50

○ Hier sítz' ich, fórmé Menschen

○ Nach méinem Bilde, × × × × × × × ×

× × × × × × × ×

〰 | Ein Geschlécht, das mir gléich sei, × × × × × × × ×

× × × × × × × ×

◎ Zu léiden ^, zu weínen,〰 | Zu genießen und zu freuen sich, × × × × × × × × × × × ×

× × × × × × × × × ×

55

/ Und déin nicht zu áchten,

○ Wie ích!

30, 36, が何故4音節内拍をもって読まれないかという疑問を解くすべはないが **Madrigalvers** 型としての要件である **alternierend 44%** を確保するためではないかという推測は不当なものと思われない。3音節 **Senkung** (=4音節内拍) に反対する **MASON** に反論して **KAYSER** は, **Wer rettete vom Tode nicht** の **Beugung** は全く非 **GOETHE** 的であると評し, **GOETHE** の手稿における **Wer half mir wider / Der Titanen Übermut ?** の別ち書きを論拠として, 詩人自身3音節 **Senkung** を拒否しなかったと述べている。

**PRETZEL** は詩行の約半数が **Alternation** の原理に服するとする **HEUSLER** の解釈が本来の比類のない表現力を無理に束縛するもので, 内在するリズムの唯一の原則即ち各行 2 **Iktus** に乗ると



き、真に躍動する響をこの詩に再現出来るとして次のように skandieren している。

Bedecke deinen Himmel, Zeus, / Mit Wolkendunst, / Und übe, dem Knaben gleich, /  
 Der Disteln köpft, / An Eichen dich und Bergeshöhn; / Mußt mir meine Erde / Doch  
 lassen stehn, / Und meine Hütte, die du nicht gebaut, / Und meinen Herd, / Um dessen  
 Glut du mich beneidest. // Ich kenne nichts Ärmeres unter der Sonn' / Als euch, Götter! /  
 Ihr nähret kümmerlich / Von Opfersteuern / Und Gebétshauch / Eure Majestät / Und  
 darbtet, / Wären nicht Kinder und Bettler / Hoffnungsvolle Toren. // Da ich ein Kind  
 war, / Nicht wußte, wo aus noch ein, / Kehrt' ich mein verirrtés Auge / Zur Sonne, als  
 wenn drüber wär' / Ein Ohr, zu hören meine Klage, / Ein Herz, wie mein's, / Sich des  
 Bedrängten zu erbarmen. // Wer half mir / Wider der Titanen Übermut? / Wer rettete  
 vom Tode mich, / Von Sklaverei? / Hast du nicht alles selbst vollendet, / Heilig glühend  
 Herz? / Und glühtest jung und gut, / Betrogen, Rettungsdank / Dem Schlafenden da  
 droben? // Ich dich ehren? / Wofür? / Hast du die Schmerzen gelindert / Je des Beladenen? /  
 Hast du die Tränen gestillet / Je des Geängsteten? / Hat nicht mich zum Manne geschmiedet,  
 Die allmächtige Zeit / Und das ewige Schicksal, / Meine Herrn und deine? // Wähntest du  
 etwa, / Ich sollte das Leben hassen, / In Wüsten fliehen, / Weil nicht alle Blüenträume  
 reiften? // Hier sitz' ich, / Forme Menschen nach meinem Bilde, / Ein Geschlecht, das  
 mir gleich sei, / Zu leiden, zu weinen, / Zu genießen und zu freuen sich, / Und dein  
 nicht zu achten, / Wie ich!

詩人の示す詩行をリズムの基本単位とみなすべきであるという考え方は HEUSLER の類型 C に  
 も共通するものであるが、こゝでは JÜNGER のいう Satz と Vers との二重の continuum のうち  
 後者だけが重視されすぎきらいがあり、PRETZEL 自身のことばを借りれば、あまりにも「劇的  
 な」把握と評せざるを得ない。

HEUSLER が Wandrers Sturmlied について触れている様に詩行のはじめの部分に 2 通りの計測  
 が可能な場合が多い。

- |   |  |
|---|--|
| <p>1 Wenn du nicht verlässest, Géníus ^ ^,<br/>             Nicht der Régen, nicht der Stúrm<br/>             Häucht ihm Scháuer übers Hérz...</p> <p>19 Wirst die wöllnen Flügel únterspreíten ^ ^,<br/>             Wenn er auf dem Félsen schläft,<br/>             Wirst mit Hüterfittigen ihn décken ^ ^<br/>             In des Háines Mitternàcht.</p> | <p>1 Wen dú nicht verlässest, Géníus,<br/>             Nicht der Régen, nicht der Stúrm ^<br/>             Haucht ihm Scháuer übers Hérz ^...</p> <p>19 Wirst die wöllnen Flügel únterspreíten,<br/>             Wenn er auf dem Félsen schläft ^,<br/>             Wirst mit Hüterfittigen ihn décken<br/>             In des Háines Mitternàcht.</p> |
|---|--|

そのいずれを選ぶかによって alternierend の詩行の占める比率は当然大きく変化するが、出来  
 るかぎり HEUSLER に拠って Typus A を skandieren した結果を数値で示すと次のようにな  
 る。前記の比率の大きいものから順に配列。

Mahomets Gesang HEUSLER の指示: Takt 数は一定しない (4, 2 が交替し奇数も現われ  
 る)。小節内容は一律に Trochäus (gier'ger, eb'ne で明らかのように 3 音節小節を避けている)、  
 2 音節上拍の必然性は認められない。従って Trochäus の Madrigal の典型で Fr. Rhy. とは呼  
 べない。

実際の計測: 68行中, ●68, そのため軽い Tónbeugung 必要 (41 Sehnedèn 51 Herrlicher 53  
 im rollendèn)

Adler und Taube HEU : Jamb. × 46, Troch. × 1, 1音節内拍 × 4, 2音節上拍 × 2, 実測 : 53行中, ○46, ●1,  $\frac{1}{-}$  4,  $\cup$  | 2, 重複  $\frac{1}{-}$  1.

Pilgers Mörge lied 実測 : 34行中, ○6, ●21, ◎1, ◎3,  $\frac{1}{-}$  2,  $\cup\cup\cup$  1.

Du kleiner Schelm < 実測 : 7行中, ○5, ◎1,  $\frac{1}{-}$  1.

Urfaust 1311~71 HEU : Jamb. と Troch. の比率に近い. 実測 : 60行中, ○22, ●20, ◎2, ◎6,  $\frac{1}{-}$  9,  $\cup$  | 2, 重複  $\frac{1}{-}$  1.

Der Wanderer HEU : リズム多義的, alternierend  $\frac{3}{8}$ . 4音節小節多数, 2音節上拍 × 16~20, 実測 : 166行中, ○53, ●59, ◎9, ◎19,  $\frac{1}{-}$  11,  $\cup\cup\cup$  8,  $\cup$  | 7, 重複  $\cup\cup\cup$  3,  $\cup$  | 2, ●に加えたもののうち  $\cup$  | へ読みかえることの出来るもの × 14.

Lilis Park HEU : Madrigalvers と Knittelvers の混合, alternierend  $\frac{3}{8}$ , ほとんど Jambus 即ち Faustvers, 非 alternierend  $\frac{3}{8}$  はきわめて活潑, 4音節内拍をもち, Takt 数 1~6 にわたる. Alexandriner は GOETHE の Madrigalvers の特徴. 実測 : 135行中, ○77, ●8, ◎18, ◎18,  $\frac{1}{-}$  7,  $\cup\cup\cup$  6,  $\cup$  | 1. 4 hebig × 57 → Knittel, Alexandriner × 4 (36, 47, 104, 129).

Wandrers Sturmlied HEU : alternierend  $\frac{3}{8}$ , ほとんど Troch. 1音節内拍 × 18, Troch. か 2音節上拍か多義性のある詩行多数. 実測 : 116行中, ○15, ●60, ◎2, ◎20,  $\frac{1}{-}$  16,  $\cup\cup\cup$  3,  $\cup$  | 後述, 重複  $\frac{1}{-}$  2,  $\cup$  | 2, ●か  $\cup$  | の選択を必要とする箇所 × 28 はすべて前者に数えた.

Felsweihe-Gesang HEU : altern.  $\frac{1}{2}$ , 上拍は 0 と 1 音節の間, 内拍は 2 と 3 音節の間にあり, 自由な Madrigalvers. 実測 : 38行中, ○5, ●14, ◎1, ◎13,  $\frac{1}{-}$  3,  $\cup\cup\cup$  2,

Gruß HEU : Jamb. と Troch. との比率に近い. 実測 : 20行中, ○5, ●7, ◎2, ◎3,  $\frac{1}{-}$  2,  $\cup\cup\cup$  1, 重複  $\frac{1}{-}$  1.

Schlechter Trost 実測 : 17行中, ○1, ●7, ◎1, ◎5,  $\frac{1}{-}$  1,  $\cup\cup\cup$  2.

Urfaust 1124~50, HEU : Adler und Taube に似ているが 3音節内拍が若干加わる. 実測 : 28行中, ○12, ●15, ◎2, ◎4,  $\frac{1}{-}$  4,  $\cup\cup\cup$  1.

Kenner und Künstler 実測 : 20行中, ○9, ●3, ◎3,  $\frac{1}{-}$  3,  $\cup$  | 2.

Askalaphus HEU : Jamb. × 64, Troch. × 9, 自由な Füllung × 64, その中に 2音節上拍, 4音節内拍. 実測 : 134行中 (HEU. によれば 137行にならなければならない. 彼の計算違いであろう.) ○63, ●9, ◎21, ◎12,  $\frac{1}{-}$  9,  $\cup\cup\cup$  7,  $\cup$  | 13, 重複  $\frac{1}{-}$  2,  $\cup\cup\cup$  1, なお 4 hebig の行が半数以上の 74行ある.

Concerto drammatico HEU : gereimt, 1音節内拍, 2音節上拍若干. 実測 : 13行中, ○7, ◎3,  $\frac{1}{-}$  2,  $\cup$  | 1, 重複  $\frac{1}{-}$  3.

Gesang der Geister HEU : 1音節内拍 × 2, Takt 数固定, altern. × 17, 非 altern. × 16 はたいてい Dakt. × 2 で, うち 12 が | × × × | × × 3拍子で読む. 実測 : 35行中, ○12, ●5, ◎2, ◎14,  $\frac{1}{-}$  2, 詳細は前出.

Proserpina HEU : altern. 46%, 1音節及び 4音節の内拍, 2音節上拍若干, 純粹な Dakt. × 2, はじめ散文, Typus A の自由なもの. 実測 : 271行中, ○56, ●67, ◎35, ◎49,  $\frac{1}{-}$  37,  $\cup\cup\cup$  9,  $\cup$  | 17, 重複  $\frac{1}{-}$  3,  $\cup$  | 1.

Prometheus HEU : altern. 44%, 1音節内拍 × 4, 4音節内拍 × 2, 3音節上拍 × 1, 休止 × 7. 実測 : 57行中, ○22, ●3, ◎9, ◎10,  $\frac{1}{-}$  4,  $\cup\cup\cup$  1,  $\cup$  | 7,  $\cup\cup$  | 1, 重複  $\cup\cup\cup$  1,  $\cup$  | 1, 詳細は前出.

Nicht mehr auf Seidenblatt < HEU : Typus A の自由なもの. 実測 : 25行中, ○6, ●4, ◎3, ◎4,  $\frac{1}{-}$  6,  $\cup\cup\cup$  1,  $\cup$  | 1.

HEUSLER が、詩行総数の40%以上 *alternierend* であるものをこの類型に分類し、50%以下のものを、「自由な」*Madrigalvers* と見なしていることが判る。

### Typus B

JÜNGER は Fr. Rhy. のひとつの出発点が、Hexamter にあるという仮説を証明するために KLOPSTOCK : *Das Wort der Deutschen* の2つの稿を比較している。

Haue mir Marmor, Künstler, || und grab in den Marmor mit Goldschrift

もとの Hexameter は || によって区切られる短い詩行に分ち書きされた。JÜNGER はこれを単なる書き換えとは見ない。詩行が 6 Takt という Versmaß によってではなく、KLOPSTOCK のいう Wortfuß 即ち Kola によって配列されたこと、Kola の大きさは1つの Haupthebung が Nebenhebung や Senkung を牽列するリズムの力によって規定されることを指摘し、Hexameter の紋事詩的な長さが、抒情詩の感動や激情を盛るのに長すぎ、「分割される」ことによって Fr. Rhy. が詩行の多様化と、Hebung の重さの多層化を獲得したと説明する。

また KAYSER がリズムの類型の1つとして der strömende Rhy. を挙げた際、その流れの河床に相応しい形式として Hexameter と Fr. Rhy. とを並べたのも | — × |, | × × × | の自由な交替によって生じる幅広さ・力強さに共通のリズムを感受したからに外ならない。

HEUSLER の Typus B を、簡単に Hexameter 型と呼んでその特徴を一層顕著にしては如何であろうか。

Elysium については、66行中 Jamb. ×10, Troch. ×12, Anapäst ×18, Daktylus-Trochäus ×24, 1音節内拍 ×2 という指示が与えられている。実際に指示通りに読むことが出来るか否かを確かめてみる。

Uns gáben die Góttér/ Auf Érden Elýsium./ | Wíe du das érste Mál/ Líebahndem dem  
Frémdling/ | Entgégentratst/ ùnd deine Hánd ihm reichtest./ | Fúhlt' er álles voraus/ |  
Wás ihm für Séligkeit/ Entgégen kéimte.// | Uns gáben die Góttér/ Auf Érden Elýsium./ |  
Wíe du den líebenden Árm/ 13 ùm den Fréúnd schlangst./ | Wíe ihm Líla's Brúst/  
Entgégen bébte./ | Wíe íhr, euch ríngs umfássend./ | In héil'ger Wónne schwebtet./ |  
Und ích, im Ánschaun sélig./ | Óhne stérblichen Néid/ Daneben stánd.// | Uns gáben die  
Góttér/ Auf Érden Elýsium./ | Wíe durch héilige Táler wír/ | Hánd' in Hándé wándelten./ |  
ùnd des Frémdlings Tréu' Sích euch versígelte./ | Dáß du dem Líebenden./ Stille  
Séhnenden/ | Die Wánge reichtest/ Zum hímmlichen Kúß.// | Uns gáben die Góttér/  
Auf Érden Elýsium./ | 33 Wénn du fern wándelst/ Am Húgelgebúsch./ | Wándeln  
Líebesgestálten/ Mít dir den Bách hináb./ | Wénn mír auf dem Felsen/ Die Sónne  
níedergéht./ | Séh' ích Fréúndegestálten/ Mír wínken/ | Durch wéhende Zwéige/ Des  
dámmernden Háins.// | Uns gáben die Góttér/ Auf Érden Elýsium./ Séh' ích,  
verschlágen/ ùnter scháuernden Hímmels/ | Óde Gestáde./ In der Vergángenheit/ |  
Góldner Myrtenháinsdámmerung/ Líla'n an deiner Hánd./ | Séh' mích Schúchternen/  
Éure Hándé fássen./ | Bítteúnd blícken./ Éure Hándé kússen —/ | Éure Áugen sích  
begégnen./ | Auf mích blícken séh' ích./ | Wérfe den hóffenden Blíck/ Auf Líla, | sie  
náhert sích mír./ Hímmliche Líppe!// | ùnd ích wánke, náhe mích, / | Blícke, séufze,  
wánke —/ | Séligkéit! Séligkéit!// | Éines Kússes Gefúhl!// | Mír gáben die Góttér/ Auf  
Érden Elýsium!// | Ách, warúm nur Elýsium! |

選択の余地は、主として行のはじめにある。Jamb. としても読むことの出来る多くの詩行を Daktylus として読まなければ上記24行の数に達することが出来ない。HEUSLER は全体のリズムの流れを上拍なし auftaktlos と受取っている。

かくて13, 33の2音節上拍も「平滑に入るため」に否定されるのである。上拍をもつ詩行の過半数が、各詩行群 (Strophe ではなく Gruppe と称せられる) の冒頭に置かれる反復詩行 Kehrreim で占められるのも特徴的である。

Elysium について、もう1つ重要な点は、みかけの2小節・4小節の連続は、文の連続 continuum から見ると、6小節・4小節の交替として読まれることである。たゞし第6・第4小節は休止となることが多い。

Die schön geschriebenen < 43行もまた6小節×15, 4小節×10の25行として次のように読むことが出来よう。

Die schön geschriebenen, / Herrlich umgüldeten / Belächeltest du, / | Die anmaßlichen  
Blätter, / | Verziehst mein Prählen / Von deiner Lieb' | und meinem / Durch dich glücklichen  
Gelingen, / | Verziehst anmütigen Selbstlob. // | Selbstlob! Nur dem Neide stinkt's, / |  
Wohlgerüch Freunden / Und eignem Schmach! // | Freude des Daseins ist groß ^, /  
Größer die Freud' am Dasein. / | Wenn du Suléika / Mich überschwänglich beglückst, / |  
Deine Leidenschaft mir zuwirfst / Als wär's ein Ball, / | Daß ich ihn fange, / Dir zurückwerfe / |  
Mein gewidmetes Ich ; / Das ist ein Augenblick! / | Und dann reißt mich von dir ^ /  
Bald der Franke, bald der Arménier. // | Aber Tage währt's, / Jahre dauert's, | daß ich  
neu erschaffe / | Tausendfältig deiner Verschwendungen Fülle, / | Auftrös'le die bunte  
Schnur meines Glücks, / | Geklöppelt tausendfädig / Von dir, o Suléika. // | Hier nun  
dagegen / Dichtrische Perlen, / | Die mir deiner Leidenschaft / | Gewaltige Brandung /  
Wurf an des Lebens / Verödeten Strand aus. / | Mit spitzen Fingern / Zierlich gelesen, / |  
Durchreißt mit juwelenem / Goldschmuck, | Nimm sie an deinen Hals, / An deinen  
Busen! / | Die Regentropfen Allahs, / Geréift in bescheidener Muschel. |

短い行のまゝで見ると、多くの1音節内拍、4音節内拍、2音節上拍を含み、Hebung 数も不定であるが、上のような計測によって Ode 的な要素はそのまゝに、なお内に隠されている滔々たる Hexameter 型のリズムを聴きとることが出来るであろう。

Harzreise im Winter について、88行から6小節×31, 4小節×17, 2小節×1を作ることが出来、Daktylus-Anapäst の動きを更に多彩にするのは1音節内拍×8, 4音節内拍×7, 2音節上拍×8であるという指示が与えられている。これらの数値を満足させるための計測は次の通りである。

Dem Geier gleich, || Der auf schweren Morgenwolken ^  
Mit sanftem Fittig ruhend ^ || Nach Beute schaut, ^  
Schwebe mein Lied.

~~~~ | / ~~~~~ Denn ein Gott hat ^ || Jedem seine Bahn || Vorgezeichnet  
~~~~ | / Die der Glückliche || Rasch zum freudigen || Ziele rennt: ^ ^  
/ Wem aber Unglück || Das Herz zusammenzog,

Er sträubt vergebens || Sich gegen die Schranken || Des ehernen Fadens  
Den die doch bittere Schere ^ || Nur einmal lös't.

In DÍckichts-Scháuer || Drängt sich das ráuhe WÍld,  
Und mit den Spérlingen || Háben lángst die Réichen  
In ihre Súmpfe sích gesénkt.

Leícht ist's folgen den Wágen, || Dèn Fortúna fúhrt,  
Wie der gemáchliche Tróß || Auf gebésserten Wégen  
Hínter des Fúrsten Éinzug.

Áber ábseits wér ist's?  
In's Gebúsch verliert sích sein Pfád,  
Hínter ihm schlägen || Die Stráuche zusámmen,  
Das Grás steht wíeder áuf, || Die Óde verschlíngt ihn.

Ách, wér héilet die Schméren || DèS, dem Bálsam zu GÍft ward?  
Dèr sích Ménschenháß || Aus der Fülle der Líebe tránk?  
Érst veráchtet, nún ein Varáchter,  
Zèhrt er héimlich áuf || Seinen éignen Wért^

In úng'núgender Sélbstsúcht.  
Ist áuf deínem Psalter, || Váter der Líebe, ein Tón  
Seínem Óhre vernéhlich, || Só erquícke sein Hérz!  
Óffné deñ úmwólkten Blíck || Úber die táusend Quéllen  
Nèben dem Dúrstenden || In der Wúste.

Dèr du der Freúden víel scháfst,  
Jédem ein überflíeßend Máß ^,  
Ségne die Brúder der Jágd || Auf der Fáhrtè des WÍlds ^  
Mit júgendlichem Úbermut || Fróhlicher Mórdsucht,  
Spáte Rácher des Únbills ^,  
Dem schon Jáhre vergéblích || Wèhrt mit Knúttel der Báuer.

Áber den Éinsamen hüll' || In deíne Góldwólken!  
Umgeb mit Wíntergrún, || Bis die Róse wíeder heránreíft,  
Die feúchten Háare, || O Líebe, deínes Díchters!

Mit der dámmernenden Fáckel || Leúchtest du íhm  
Dúrch die Fúrten bei Nácht,  
Úber grúndlose Wége || Auf óden Gefílden;  
Mit dem táusendfárbigen Mórgen || Láchst du ins Hérz íhm  
Mit dem beízenden Stúrm ^ || Trágst du ihn hóch empór;  
Wínterstróme stúrzén von Felsen || In seine Psálmén  
Und Áltar des líeblichsten Dánk  
Wírd íhm dèS gefúrchtetén Gípfels || Schnéebéhángner Scheítel,  
Dèn mit Géisterreihen || Kránzten áhnende Vólker.

Du stéhst mit unerfórschtem Búsen  
 Geheímnisvoll óffenbar || Óber der érstáunten Welt,  
 Und scháust aus Wólken || Auf ihre Réiche und Hérrlichkeit,  
 Díe dú áus den Ádern deiner Brúder || Nében dir wásserst.

各行の特徴を記号で示し HEUSLER の与えた数値の確認に用いた。2音節上拍の数は全体を88行とするか49行とするかで変化するが、こゝでは後の条件で計測した。

前傾的 proklitisch な音節、例えば前置詞、冠詞、所有代名詞に、3音節以上の Senkung を避けなければならない場合を別として、時に Hebung が置かれ、時に置かれないという不統一は、4小節又は6小節と見なされる詩行夫々の内部に於ける均衡から必然的に結果される。

Typus B の Skansion の結果は次の通りである。Daktylus-Anapäst 詩行の占める比率の大きいものから順に配列。

Nereidenchor HEU : 均勢のとれた Daktylus-Anapäst の流れ。実測 : 17行中、●1, ◎4, ◎11, ◡ | 1, ●は◡ | として読むことも出来る。

Herbstgefühl HEU : Jamb. × 4, Daktylus-Anapäst × 11, 1音節内拍 × 1は、隣り合う行を併せて次のように読むべきである。

|  |     |                    |
|--|-----|--------------------|
| Fétter grúne, du Láub,    Am Rébengeländer                   | ^ ^ | ^ 6 k              |
| Hier mein Fénster heráuf !                                   | ^   | ^ 4 s              |
| Gedrángter quéllet,    Zwillingsbéeren, und réifet           | ^ ^ | A 6 k              |
| Schnéller und glánzet vóller !                               | ^   | ^ 4 k              |
| Euch brútet der Mútter Sónne    Scheídeblick; euch umsáuselt |     | A 6 <sup>2</sup> v |
| Des hólden Hímmels    Frúchtende Fülle;                      |     | A 4 <sup>2</sup> v |
| Euch kúhlet des Mónde's    Fréundlicher Záuberháuch          | ^   | A 6 s              |
| Und euch betáuen, ách !    Aus díesen Áugen                  | ^   | ^ 6 k              |
| Der éwig belébenden Líebe                                    | ^ ^ | A 4 k              |
| Vóllschwéllende Tránen.                                      | ^   | ^ 4 k              |

数値 : 16行 → 10行, ◎6, ●3, ◡ 1.

Mut 実測 : 7行中, ●1, ◎6, 固定的4小節。

Jene garstige Vettel < HEU : 行をこえて読め。実測 : 23行中, ◎5, ●5, ◡ 1, ◡ 1, 重複 ◡ 1.

An Lida 実測 : 11行中, ◎2, ◎2, ●5, ◡ 1, ◡ 1. 6小節 × 5, 4小節 × 4の9行として読むことが出来る。

Faust 9985~91 HEU : 均勢のとれた Dakt.-Anap. の流れ。実測 : 7行中, ◎2, ●3, ◡ 1, ◡ 1, 6小節, 4小節の交替。

Anklag HEU : Knittel への近づき。実測 : 38行中, ◎3, ●6, ◎11, ●12, ◡ 2, ◡ 2, ◡ | 2, 4 hebig × 16.

Die schön geschriebenen < HEU : 行をこえて読め。実測 : 43行 → 25行中, ●1, ◎9, ◎6, ◡ 5, ◡ 1, ◡ | 3, 6小節 × 10, 4小節 × 2.

Pindars Ode HEU : 4小節をこえない, 上拍なし × 36, 上拍 × 10, altern. × 7, 非 altern. × 49, 1音節内拍9及至11, 4音節内拍 × 2 (35, 42) 実測 : 56行中, ◎3, ●4, ◎12, ◎24, ◡ 10, ◡ 1, ◡ 2, 重複 ◡ 1, ◡ 1.

Elysium HEU : Jamb. × 10, Troch. × 12, Anap. × 18, Dakt.-Troch. × 24, 1音節内拍 × 2,

6小節と4小節の交替。実測：66行中，○10，●12，◎18，◎24，— 2，詳細は前出。

Bleibe, bleibe bei mir< 実測：8行中，●3，◎5，◎は常に | — × | × × × | — × | ...

Laß mich weinen< HEU: Ode 的。実測：15行中，○1，●1，◎3，◎4，— 3，— 3，— 3，— 2，重複 — 2，6小節×3，4小節×8，5小節×1と読むことが出来る。

Harzreise HEU: 詳細は前出，実測：88行→49行中，○2，●1，◎9，◎19，— 5，— 6，— 6，— 7，重複 — 3，— 1，— 1，詳細は前出。

Faust 9110~21 HEU: Ode 的。実測：12行中，●1，◎6，— 4，— 1。

Faust 9970~80 HEU: Ode 的。実測：11行中，○1，●2，◎2，◎3，— 2，— 1，重複 — 1。

Daß Suleika von Jussuph< HEU: Knittel への近づき。実測：10行中，○2，◎1，◎3，— 3，— 1，— 1，— 1と— 1を含む4 hebig×9，8行4組の Paarreim から Knittel との近親性を結論してよい。

Behrisch-Oden HEU: 1音節内拍×19，4音節内拍×8，2音節上拍×8，3音節上拍×2。実測：112行中，○25，●17，◎13，◎21，— 19，— 7，— 8，— 3，重複 — 1。

Hexameter に関して，HEUSLER と PRETZEL が2音節内拍と3音節内拍との占める割合によって詩行のリズムの相違を示すことが出来ると指摘したが，この類型についても同じ分析が可能であろう。

2音節上拍は，TYPUS A にとっては，たしかに異質 heterogen なものであるとしても，Typus B にとっては，むしろ同質 homogen の要素に加えるべきではないかという問題が残るが，差当りは HEUSLER に従い，これを除外して Dakt.-Anap. 詩行が，全詩行の70%程度までを Hexameter 性をもつもの，60%前後で Takt 数のほゞ一定なもの，50%以下で所謂 Ode 的要素の強いものという3群への分類が可能である。

### Typus C

前に触れた Mahomets Gesang を除いて，HEUSLER が Fr. Rhy. の名称を拒否した他の5つの詩は，すべて固定的な小節数を持つとみなされ得る点で共通性をもつので Typus C の仮称の下に考察することとした。

Meine Göttin は，1 hebig×1，2 hebig×65，3 hebig×11 と計測すべきでなく，各行を重い3拍子の小節×2として読むべきであるとして，HEUSLER は，その例示に付点2分音符，2分音符，付点4分音符，4分音符，8分音符を用いて音節の長さ，実は重さに微妙な段階を附与している。すべての行に2つの Hebung を置く，小節内の音節数は1，2，3，4，5にわたるが，最も頻度の高い3を採り，これ以外の音節数を含む小節をも平均化して，全体に3拍子の taktieren を与える——取扱いをこのように単純化しながら sakndieren した結果は次の通りである。

Welcher Unsterblichen || Soll der höchste Preis sein? || Mit niemand streit' ich, || Aber ich |  
 × × × | — × | — × × | × × × | — × | × × | × × × |  
 geb' ihn || Der ewig beweglichen, || Immer neuen, || Seltsamen Tochter Jovis, || Seinem  
 × × × | × × × | — × | — × | × × × | — × × × |  
 Schöoskinder, || Der Phantasie.  
 — | × × | × × | —

Denn ihr hat er || Alle Launen, || Die er sonst nur allein || Sich vorbehält, || Zügeständen, ||  
 — × | — × | — × | × × — | × × × | — × | — × | — | — × | × ×  
 Und hat seine Freude || An der Thürin.  
 × | × × × | — × | — × | — ×

Sie mag rosenbekränzt || Mit dem Lilienstängel || Blumentäler betreten, || Sommervögeln  
 — — | × × × | × × × | — × | × × × | × × × | × × × | — × × × | — × × ×  
 gebieten, || Und leichtnährenden Tau || Mit Bienenlippen || Von Blüten saugen: || Oder sie  
 — | × × × | × × × | — × | — × | × × × | — × | × × × | × × × | × × ×  
 mag || Mit fliegendem Haar || Und düsterm Blicke || Im Winde säusen || Um Felsenwände, ||  
 — × | × × × | — × | — × | — × | — × | × × × | — × | × × × | — × | × × ×  
 Und tausendfärbig, || Wie Morgen und Abend, || Immer wöchelnd, || Wie Mondesblicke, ||  
 × | — × | × × × | × × × | — × | — × | × × × | — × | × × × | — × | × × ×  
 Den Sterdlichen scheinen.  
 × | × × × | — ×

Läßt uns alle || Den Vater preisen! || Den alten höhnen, || Der solche eine schöne ||  
 — × | × × × | — × | × × × | — × | × × × | — × | × × × | — × | × × ×  
 Unverwäckliche Gättin || Dem sterblichen Menschen || Gesellen mögen!  
 — — | × × × | × × × | × × × | × × × | — × | — ×

Denn uns allein || Hat er sie verbunden || Mit Himmelsband, || Und ihr geboten, || In Freud'  
 × × × | — | × × × | — | × × × | — | — | × × × | — | — | × × × | —  
 und Elend, || Als treue Gättin || Nicht zu entweichen.  
 × | × × × | — × | — × | × × × | — ×

Alle die ändern || Armen Geschlechter || Der kinderreichen || Lebendigen Erde || Wandeln  
 × × × | — × | × × × | — × | × × × | — × | × × × | — × | × × × | — × | × × ×  
 und weiden || In dunkelm Genuß || Und trüben Schmerzen || Des augenblicklichen ||  
 × | × × × | — × | — × | — × | — × | × × × | — × | × × × | — × | × × ×  
 Verschränkten Lebens, || Gebeugt vom Jöche || Der Nötdürft.  
 — | — × | × × × | — × | — × | × × × | — | — | — | —

Uns aber hat er || Seine gewändteste || Verzärtelte Töchter, || Fréut euch! gegönnt. ||  
 — | — × | — × | — × × × | — × × × | — | — × × × | — × | — × × × | — × × ×  
 Begegnet ihr lieblich, || Wie einer Geliebten || Läßt ihr die Würde || Der Frauen im  
 × | × × × | — × | — × × × | — × | — × × × | — × × × | — × × × | — × × ×  
 Häus! ||  
 — | — | —

Und daß die alte || Schwiegermutter Weisheit || Das zarte Seelchen || Já nicht beleid'ge!  
 × × × | — × | — × × × | — × × × | — × | — × × × | — | — × × ×



Doch kénnt' ich ihre Schwéster, || Die ältere, gesétztere, || Meine stílle Fréundin: || Ó daβ  
 × | ˘ ˘ × × | ˘ × × | ˘ ˘ × × | ˘ ˘ × ˘ ˘ | ˘ × | ˘ × × | ˘ × ×  
 die érst || Mit dem Líchte des Lebén || Sích von mir wénde, || Die édle Tréiberin, ||  
 × | ˘ × × | ˘ × × | ˘ × × | ˘ × × | ˘ × × | ˘ × × | ˘ × × |  
 Trósterin Hóffnung!  
 ˘ × | ˘ ×

一つの群に属するすべての詩行を3拍子の連続として繋いで読むことになるが、そこに独自の軽快さ、HEUSLERによれば、敬虔で情愛に充ち同時に悪戯っぽい調子を聴きとることが出来る。Schwager Kronosで2 hebig, 3 hebigの詩行は見せかけにすぎず、HEUSLERにとっては4小節、多く第4のTaktは充されず4k, 4sの形をとる。Hebung相互の重さについて一定の秩序はない、即ちmonopodischである。

Spúde dich, Krónos! / Fórt den ráselnden Trótt! / Bérgab gléitet der Wég; / Ékles Schwíndeln zógert / Mír vor die Stúrne dein Záudern. / Frísch, hólpert es gléich, / Über Stóck und Steíne den Trótt / Rásch in's Lebén hineín! // Nún schön wíeder / Dén erátmenden Schrítt / Múhsam Bérg hinauf! / Auf denn, nícht tráge denn, / Strébend und hóffend hinán! // Weít, hóch, hérrlich der Blíck / Ríngs in's Lebén hineín / Vom Gebírg' zum Gebírg' / Schwébet der éwige Géist, / Éwigen Lebénshénde vóll. // Seítwärts des Überdachs Schátten / Zíeht dich án, / Und ein Fríschung verhéißender Blíck / Auf der Schwélle des Mádchens dá. / Lábe dich! — Mír auch, Mádchen, / Díesen scháumenden Tránk, / Díesen fríschen Gesúndheitsblíck! // Áb denn, ráscher hinà! / Síeh, die Sónne sínt! / Èh' sie sínt, èh' mích Gréisen / Ergreíft im Moore Nébeldüft, / Entzáhnte Kíefer schnáttern / Und das schlótternde Gebéin. // Trúnknèn vom létzten Stráhl / Reíß mích, ein Féuerméer / Mír im scháumenden Aug' / Mích gebléndeten Táumelnden / In der Hólle náchtliches Tór. // Tóne, Schwáger, in's Hórn, / Ráble den schállenden Tráb, / Daß der Órcus vernéhme: wír kómmen, / Daß gleich án der Túre / Der Wírt uns fréundlich empfánge.

Genymedも、Hebungの数だけを問題にすると、1~5の不揃いな詩行から成るが、HEUSLERにとっては、4 hebigしかもDipodieの構造①2③4をもち、小節は|—˘××|の定まった型をとろうとする傾向にあるという。

Wie im Mórgeglánze || Du ríngs mích ánglúhst, || Frúhling, Gelfebtèr! ||  
 Mit táusendfácher Líbeswónne || ^Sích án mein Hérz drángt ||  
 Deiner éwígen Wármè || Héílig Gefúhl^, || Unéndliche Schóne!

^Daß ích dich fássen mócht || ^In díesen Árm!

Ách an deínem Búsèn || Líeg ích, schmáchtè, || Und deine Blúmèn, dein Grás^^ ||  
 Drángen sích án mein Hérz^, || Du kúhlst ^ den brénnendèn || Dúrst méines Búsèns, ||  
 Líeblicher Mórgevwínd! || Rúft dréín die Náchtigáll || Líebend nach mír aus dem Nébeltal.

Ich kómm'^, ích kómmè! || Wohín? Ách, wohín?^

Hinauf^ ! Hinauf strèbt's. || Es schwebèn die Wòlkèn || Ábwàrts, die Wòlkèn ||  
Neigen sich der sehnenden Liebe. || Mir^^ ! Mir^^ ! || ^ In euerm Schóosse ||  
Auf- ^^ wàrts ^^ ! || Umfàngend umfàngen ! || Aufwàrts an deinen Búsen, ||  
Alliebender Väter !

Das Göttliche と Grenzen der Menschheit では (×) | — × × | — (×) の形が印象を決定し | × × × × | × × × × | という Langtakt × 2 の図式にきわめて近いとする。Das Göttliche をこの指示通りに読むと次のようになる。

Édel sei der Mènsch^, || Hùlfreich und gút^ ! || Denn das ^ alléin ||  
Unterscheidet ihn^ || Von allen Wésen, || Die wir kènnen.

Heil den unbekanntèn || Höhern Wésen, || Die wir àhnen^ ! ||  
Ihnen gleichè der Mènsch^ ; || Sein Bèispiel léhr' uns || Jènè glàuben.

Dènn unfühlend || Ist die Natur^ : || Es léuchtet die Sønnè || Über Bös' und Gùtè, ||  
Und dem Verbrècher || Glàzen, wie dem Bèsten, || Der Mònd^ und die Stèrnè.

Wínd^ und Stròme, || Dònner und Hágel || Ràuschèn ihren Wég^, ||  
23 Und ergreifèn, || Vorüber eilènd, || Einen um den àndern.

Auch só das Glúck^^ || Táppt unter die Mèngè, || Fàßt bald des Knàbèn ||  
Lóckige Únschuld, || Bâld auch den kâhlen || Schlúdigèn Scheitèl.

Nach ewigen, éhrnèn, || Gròßèn Gesètzèn || Müssen wir allè || Únsrès Dásèins ||  
Kreisé vollèndèn.

Nur alléin ^ der Mènsch^ || Vermág das Únmògliche: || Er unterscheidet, ||  
Wâhlet und richtèt; || Er kànn dem Àugenblíck || Dâuèr verléihèn.

Er alléin^ darf^ || Den Gùtèn lóhnen, || Den Bösèn strafèn, || Heilèn und rètten, ||  
Àlles Írrendè^, Schwéifèndè || Nützlich verbíndèn.

Und wir verèhren || 50 Die Únstèrblichèn, || Als wàren sie Mènschèn, ||  
Tàtèn im Gròßen, || wàs der Bèstè im Klèinen || Tút oder môchte.

Der édle Mènsch^ || Sei hùlfreich und gút'^ ! || Únèrmüdet scháf' èr ||  
Das Nützlichè, Réchtè, || Séi uns ein Vórbild || Jèner geàhnetèn Wésen !

Grenzen der Menschheit にも共通するので、こゝで行われる計測 Messen というよりは計量 Wägen の操作を整理すると、1) 1 詩行に 2 つの Haupthebung を置くべき個所を見出し、その後には夫々 1 つの Nebenhebung を置くが、Haupthebung の後に 2 音節が続く場合、Langtakt の前半と後半とでは置き場所が異なる。例 || Schúldigen Scheitel ||, || Vermag das Unmògliche || 2) 3hebige の詩行の第 1 Hebung は、直前の詩行に接合して、その後半の Nebenhebung として読む。例 9/10, 46/47, 52/53, 59/60 3) Nebenhebung を置くための適当な音節が見出し得な

い場合は休止を置くこともある。4) 23, 50行は、例外的に 4Hebung を持ち得ない不完全な詩行である。5) 一般的には 2 hebig と見なされる詩行を Langtakt×2 と解釈する為には、当然それまで Hebung の置かれなかった後傾的 enklitisch な音節、例えば allen, Wesen, kennen にも Nebenhebung を置く必要が生ずる。そして、これらの語尾が betont として発音されることは実際にはないと考えなければならない。この Saknsion のもつ意味は、のぼし Dehnung の効果である。Edel sei der Mensch, に対する 2つ計測 a) ××××× と b) ×××××∧ を比較すると、a) の軽快、躍動 b) の重厚、沈静の対比と同時に、この1行が読み上げられる所要時間の相違が明らかになる。Hebung と Hebung との間隔はほぼ等しく、発音の上で強調されなくても、Hebung の数が増加することで詩行はひきのばされて行くからである。

これら3つの詩の計測に於いて、我々は Stabreimvers から Knittelvers にいたる „rein deutsch” な, Füllung 自由の4小節詩行に対する HEUSLER の深い愛着を看過することは出来ない。

「個々の Stabreimvers が、どのようにリズムを与えられ、朗読さるべきかについて、HEUSLER 以前にも同時代にも、きわめて多様な学説が存在した。今日彼の体系に対して行われる批判の中で、こゝが主要な攻撃点の1つである。

HEU. は Stabr. の中でも彼の詩法論の根本原理である Takt が具現されていると見る。これに対して原理的にも、個々の例についても唱えられるに相違ないあらゆる異論にもかゝらず、尚かつ Stabr. にリズムを与えるこの方法が概観されるべきである——Stabr. のこよなく豊かで、変化に富むリズムの流れを追感し、詳細にわたり記述するための『法則』(HEU. 自身は勿論少くともそう理解されることを望んだのだが)としてではなく、1つの『可能性』として。」O. PAUL のこのことばは、ほとんどそのまま GOETHE の Fr. Rhy. についての HEUSLER の解釈にも妥当するものである。

## LITERATUR

- GOETHE : Werke. Weimar : H. Böhlau. 1887  
 GOETHE : Werke. 9. Aufl. Hamburg : Chr. Wegner. 1969  
 ECHTMEYER/neugestaltet v. WIESE, Benno von : Deutsche Gedichte. Düsseldorf : A. Bagel. 1966  
 HEUSLER, Andreas : Deutsche Versgeschichte. 3 Bde. 2. Aufl. Berlin : Walter de Gruyter. 1956  
 SCHLAWA, Fritz : Neudeutsche Metrik. Stuttgart : J. B. Metzler, Sammlung Metzler Bd. 112. 1972  
 SCHLAWA, Fritz : Die deutschen Strophenformen. Stuttgart : J. B. Metzler. 1972  
 JÜNGER, Friedrich Georg : Rhythmus und Sprache im deutschen Gedichte. 2. Aufl. Stuttgart : E. Klett. 1966  
 PRETZEL, Ulrich : Deutsche Verskunst, in < Deutsche Philologie im Aufriß Bd. III > hrsg. v. W. STAMMLER. 2. Aufl. Berlin : E. Schmidt. 1962  
 MERKER/STAMMLER : Reallexikon der deutschen Literaturgeschichte Bd. I. 2. Aufl. hrsg. v. KOHLSCHMIDT/MOHR. Berlin : Walter de Gruyter. 1958  
 PAUL, Otto/GLIER, Ingeborg : Deutsche Metrik. 7. Aufl. München : M. Hueber 1968  
 WILPERT, Gero von : Sachwörterbuch der Literatur. 4. Aufl. Stuttgart : A. Kröner, KTA Bd. 231. 1964  
 KAYSER, Wolfgang : Das sprachliche Kunstwerk. 13. Aufl. Bern/München : Franke. 1968  
 KAYSER, Wolfgang : Geschichte des deutschen Verses. 2. Aufl. München : A. Franke, UTB Bd. 4. 1971

(昭和51年9月28日受理)

(昭和52年3月29日分冊発行)

